

金泥のよう爛々たる眩さで燦抜し、網膜の中心窩を射る。炙られ焦がれ、言葉が現実へともがき出ようとし、文字となり、文字となつても飽き足らず、文字の示義を捨て（意味とは抽象であり、非物質的だから）意匠となり、意匠となつても未だ残る象徴の余韻を振り払おうと身悶え続け、遂には墨やインクであることを切望するも、なお焦燥に炙られ続けとせば、次に逝くべき所と云うものにどこが考えられるか、私には見当もつかない。

ゆつくり擦られる弦から醸されるバイオリンの音のように、ものの影が長く伸ばされ、次第に深く暮れる濃蜜色の黄昏時、光射が茜を帯びた純金色に空気を涵す。シャンパンの入ったクリスタル・グラスを透かして事物を見るような生々しさがあつて、その堪えがたいリアリティが寂かに鬱とたたずむ。

私は『オシアン』を手にとつた。ゲルマン民族の高貴なる荒々しさ、陰鬱な天候、怒号する海、凄惨ですらある激情の戦士たち。冒頭、詩人の嘆きで開始される。かつてゲーテが『若きウェルテルの悩み』でドラマチックに引用した物語。

吐歎、そして後、ようやく私は意を決し、私のニューロンが自発的に生んだ虚しい像を再び眺めやつた。

ニューロンは私の状況などお構いなしにいつも自発的だ。私がそれを使役するなどあり得ない。『彼』が生まれるのは私がそれを想像したいと考え、思い描くからだ。私はその意欲の上にかたちを注ぎ做されているに過ぎない。気がつけば『ここ』が展開され終わっていて、『ここ』があるとは『ここ』にいと同意であるらしく、既に『いる』があり、『いる』とは『自分』と云う意識であつて、そう考えるのがルールだからこうしている。ようだ。それ以上の分析は不可能と定められていてなにもできない。どうにもならない。仕方がない。焦燥がなにかを求め、あがく以外にないが、なにもない。

そして私が自分の立場を超えて眺めるならば私の脳裏に泛ぶ『彼』と私とは同等同質同郷である。私には実存的にそうと感ぜられなくとも、思考を廻らせて知り得る限りにおいては、それが科学的な事実なのである。我々の知が及ぶのはそこまでしかない。その先は既に知を超えている。

そもそも我々は我々の知が正しいものであるかを証明する術がない。適当なところで打ち切つて、これでよい、と思う他にどんな途がある？

彼は燃えたる炎のように立つ。

我が脳髓の頁を紐解くならば、詩篇第一章第九段第四節から第七節にかけて、かくのごとくに

記された文字群が点綴するのを観るであらう。

『……緋色が生々しく、裂けた動脈からあふれ噴く血に濡れているかのよう。滑らかで奥深いつややかさが濃い。それが両肩で渦巻く彼の髪の毛を做す色彩。

暗鬱に双眸を翳し、垂れた前髪から覗く、眼差し虚ろさ。額の左半分は蛇行する尾は刺青の青い龍神。その龍尾が脛を跨いだ先には左頬にて躍っている四肢、くねる胴体、玉をつかむ龍爪、龍首は唇の左傍らを長く伸び、顎の左に雷霆のごとく縦裂けた双眸の瞳孔、顎の中央に彫られた峻なる牙、炎爛たる舌、がある。これが彼、すなわち彼の自意識だ……』

脳髓の書物よ、先祖伝来の継承よ、ニューロンはインパルスの刺激を受けてシナプス小胞から飛散させる伝達物質を隣のニューロンの樹状突起に着附させ、相手のレセプターを開き、開かれた者は被膜の外からイオンの流入を受け、脱分極化し、インパルスを生じてそれがまたそのシナプス小胞を刺激し、イタルは現実存在する。聖なる立像のようにある。私は恍惚と眺めて感嘆する。

なんと云う、屈託のない気晴らしか。慮り煩う権利もない。まぶたの裏には次々と世界史が現われ、私が後追いで現象する。

やがて燦々たる真夏の太陽が爾^{それ}目らが在ることを根拠として自らを頼りに存在せしめる。我が思考にとつては全くの唐突であり、殆ど暴力でしかなく、なんら理知的な説明も、根拠も原因も理由も見出せない。我が思考を占拠し、蒼穹を設置し、その下に校庭と樹木と校舎、階の一室に独り坐る緋色の髪の少年を配する。まだこの頃、顔の刺青はない。私は既にこの世界に投げ入れられている。

イタルはペグを回し、弦の張りを調整しつつ窓から校庭を見下ろす。だれもないことがわかれると視線をギターのヘッドに戻す。陽射しに炒られて光を反射させている。ペグは鍍金された金属に特有な艶を即物的に露わにする。

フィンガーボードには目をやらずに軽く指を走らせ、即興し、エフェクターを通してマーシヤル・アンプから歪んだ爪弾き音を響かせる。硬く乾いた響きだ。好爽である。イタルにとつては初めて試みたオープンDチューニングだった。開放弦（弦を抑えない状態）でDコード（D・F

#・△を構成するように調律することだが、これで弾こうとすると指の動きが普段と異なり、新鮮だった。今度はいくつかのコードを鳴らしてみる。

「慣れが必要だな、あたりまえだが」

考えていたリフをいくつか試してみた。今度は指板を見ながらだ。悪くないサウンドだと思えたが、自分が作ったものは多少不自然でもそれなりの解釈が当てられ、客観的に判断することが難しい。

「録音してから聴いてみよう」

独り呟いてから再び校庭を見やる。白っぽく乾いた土を囲む樅や櫟が熱気に揺れていた。校庭を迂回するように校舎に沿って始まり、塀の内をなぞって正門へと続く歩道がある。いく人か同級生の女子たちが出て来ていた。その中に彼女を見つけてしまふ。半無意識的にしろ、探していたのだから当然であつた。

らっか
審美が歩く。鼻と上唇とが尖つて突き出している。
リアル
現実的だ。

イタルは無表情を装いつつ眼のみで軌跡を追う。シャンパン・ゴールドに燦めく髪。小麦色の膚で、制服姿に飾りのないビーチ・サンダル履いた素足。それが男子の眼を惹くことを計算している。

地中海色をしたコンタクト・レンズをした双眸が並んだラピスラズリ。蝶々の装飾が附いたアンティーク・ジュエリーのようだ。なぜならマスカラに延長されて反った睫が触角、グロスを塗って燐光を放つ脛が羽根で、南米の蝶々がラピスを縁取っているかのように見えるからだ。

イタルはリビアのアテナを想起する。

ギリシア神話の智慧と戦いとの女神はその起源の一つに南方渡来説を持つ。リビアのトリートーニス湖の辺で生まれ、クレタ島に渡り、次いで現在ギリシアの首都であるアテネに定住した、と云ふものだ。

普通、西欧的なギリシア風の白皙のアテナ女神像を描くが、その説に従うならば褐色の処女アテナ・バルテノス神アテナを妄想せねばならないことになる。眦のくつきりした黒い巻き髪のパラス・アテナ。史

実においても紀元前四〇〇〇年ころからリビア人のクレタ移住が始まり、エジプト第二王朝の時代であつた紀元前二〇〇〇年ころにナイル川の西方のデルタ地帯から女神信仰を持ったリビア人らがクレタ島に逃れている。その後、彼の島でミノア文明が生じていることを考慮すれば、彼の想像は自ずとクノッソス宮殿に描かれていた通称『パリジエンヌ』の姿とも重なるを得ない。

似てはいないがそのアイデアが楽夏像に投影され、イタルを駆り立てた。なぜ楽夏のそう云うアイデアを投影するかはわからない。だが或る日、なにかが彼を惹きつけ、彼にそれを強要したのだ。彼女を心に懸ける必然性は自身にも晰らかではない。イタルもそれは認識していた。或る人が愛され、或る人が顧みられないのは道徳や精神の高貴さによるものではない。人間は平等ではなく、すべて運命なのである。本来ならば彼女のように愛されるべきであつたたくさんの女の子たちがいたはずであつた。

一人の女子が彼の注視に気が付き指差して楽夏に教える。女の子たちが一斉に視線をイタルの方に向けた。楽夏も彼を見ている。イタルはそっぽを向くふりをし、なお横目で注視し続けている。女の子たちは再び視線を戻して互いに向かい合い、笑い声を上げた。楽夏だけが意味ありげに眼差しを残しながら仲間たちの方に向き直る。イタルからはアーモンドのようなかたちの眼と、つんとしました鼻尖とがゆつくりと横に向けられるように見えた。そうやって不用意に眺めていると、他の女子たちはもう一度イタルに一瞥投げてから顔を擧げてから、すぐにまた楽夏の方へと向き直り、会話の続きを再開し始めた。

「いいね。」

それさ。

俺は操り人形ジャックなのさ。おまえらの侮蔑が最高に俺をハイにさせる。俺を下ライブする。十二気筒水平対向エンジンの鼓動のように俺を鼓舞しやがる。

楽夏。

おまえは俺の好意を感じて味わっているんだ。もつとつまみを搾るために挑発しているんだ。俺をじらしている。からかっている。そうさ、そう云うおまえが俺は好きなんだ。古代の女神のように素淫で残虐で理不尽だ。なんて素敵なんだ。おまえからまともな科白なんか聞きたくない。そんなもんを聞くものなら、俺の女神は死んじゃう。

俺は俺のためにまえに惚れているんだ。恋なんてそんなもんじゃないか」

ばらみと
吠羅蜜斗は金色に染めた髪を自分で刈って長短ばらばらに立て寝癖のようにしている。彼はこれがオリジナル・パンクだぜと嘯いて安全ピンのピアスを揺すり、へらへら笑う。

中学二年生でパンク・バンド『死す・ROCKS』を結成し、高等学校進学後、真神高最強のネガティブ・パンク・バンド『叛(アンチ)』に最年少で参加し、ベースを弾いていたが、他のメンバーが卒業と同時に上京して活動を行うために強制的に脱退させられていた。パンクの匂いがあるだけで技術不足の吠羅蜜斗は学業があることを理由にクビとされたのである。

奇妙な名の所以は彼の生家にあった。軟邨村にある古刹貞観止國寺の住職は畏れ多くも摩訶般若波羅蜜多心経から採った名を息子につけたのである。なぜ檀家の響聲を買わなかったのかは人心の妙と云うものだろう。人はなぜだかわからないことに時々憤り、怒るべきことにいつも無関心である。

『v v v (the quadruple of V) ザ・クワドルプル・オブ・ヴィ:4倍のV』と云うのはバンドの名だが、Very Very Well - done に由来し、叭羅蜜斗はそのベースリストであり、イタルがヴォーカル兼ギタリストであるからこの日、叭羅蜜斗は第二音楽室に入って来るなり、ストロークを繰り返していたイタルをなじった。

「なんだよ、そのチューニング。もしかしてオープンD？ 弦が緩み過ぎやしないか。しかも六弦を外して、キース・リチャーズじゃあるまいし。」

レイジーなリフのフィーリングとしちゃあ、わるくもないが。ブルージーと言えなくもないしな。だがそれでもギヤツチー過ぎる。コマーシヤリズムじゃないか。迎合主義は俺たちのコンセプトじゃないぜ」

「おまえのそのセリフにはうんざりだ。まともな演奏もできないくせに、アヴァンギャルドか。前衛的って云うのはへたくそって意味じゃないようだが。」

迎合主義を嘲ること自体が通俗的だ。

そうじゃないんだ。いいか、アヴァンギャルドはマイナーシーンにはありふれている。こう云うのが逆にアヴァンギャルドなんだ。そう云うコンセプトさ。この曲はコンセプトチュアルなんだ」

「むちゃ言うな。わかるかよ。聴いただけでそんなこと、だれにもわからないだろうが」

「そっや。」

それがつまり大衆迎合的じゃないって云うことさ。わかることがどうして重要なんだ。つまり

おまえは自家撞着だ。おまえの考え方こそ大衆迎合主義なのさ」

「イタル、おまえとは話にならない」

「それがバンドのコンセプトだろ？」

バンド結成を提案したのはもう一人の生徒、普^{ふしよ}蕭と云うイタルの同級生だった。で、叭羅蜜斗に続いて普蕭も部屋に入って来た。真つ直ぐな髪を顎の位置で切り揃えて縁なしの眼鏡をかけ、嘴のような鼻いつも眉根を寄せたぎよる眼で、少々痩せ過ぎの少年だった。

「イタルの好きなようにやってみよう。やってみて、それから決めればいい。観念を振り翳し、論し合うことにどんな意味がある。」

それにな。

人のことが言えるか、叭羅蜜斗。君のベースだって、コードのルート音を平ミニュートしながらゴリガリボロボトつてなピッキングしているだけじゃないか。なんのアンサンブルにもなっていない。

いや、いいんだ。

そんなことはそもそも僕には問題じゃない。僕が君らに声をかけたのは音楽的なアプローチにうんざりしていたからだ。もっなんとも言っていると思うが。

関係ない者同士がぶつかることで予想を裏切る曲が生まれる。違和感、異質感、なにより異物感。しかも金属的な、乾いた、非情な感じ、そっつうのが快感になる」

この中でバンド経験が初めてなのはイタルだけだ。音楽への関心など一向見せなかった彼が突如フオークギター一本を手に路上ライブをやるようになった。

最初はロバート・ジョンソンを耳で聴いただけのたらしめなコピーで、よく人前でやれたものだと感じるほどの酷さだった。だがそんなことをそもそも気にする彼だろうか。彼は気にせず、吼えた。かつてアメリカ南部の農園にいた黒人たちの間で今に謂うBluesがホラーと呼ばれていたことを彼は意識して文字どおり吼えていた。

むつん田舎の畦道でやつても仕方がない。表現は常に観られることを前提とする。彼もそこは常人人で、地元ではなく、安房市内の神中中央公園まで出向いてそれを演じた。尤も通っている真神高等学校が市内にあったので、普通に通学する日には単に行き帰りの道筋でしかないのだが。

当然のことに帰宅途中の生徒らの眼に触れた。普蕭はしばらく聴いていた。彼はRZDのバンド（その名も『RZD』だ）を辞めたばかりだったのである。RZDの本名は草馬（そうま）彼らと同じく二年生で、イタルが隠棲したアパートの借主であり、楽夏の彼氏だった。聞き終えて普蕭が言う。

「君はもつと練習した方がいい。僕がドラムを叩こう。叭羅蜜斗も誘ってあるんだ」

普蕭はこれの中では唯一まともな音楽教育を受けた人間だった。楽譜が読めた。二歳の頃にピアノやバイオリンを習わされていた。とは言え、それも小学四年で終わっている。イングヴェイ・マルムステイーンの光速のギターを聴いて以来、音楽への嗜好が転向してしまったのである。だから本来はギターを担当したかった。だがイタルも叭羅蜜斗も正確なドラムス・プレイをなせず、選択の余地なくドラムスの椅子に坐っている。

『RZD』時代に寡黙な俊才プレイヤーを自負していた彼が敢えてイタルや叭羅蜜斗などに声をかけて『V.V.W』での活動を択んだのをだれもが不思議に思った。普蕭はそんなことは意にも介

さなかった。人の評価などいい加減なものである。だれもが自分のために評価する。だから自分のなす評価が一番論外だ。しかしあえてそれを扱んだのである。よって初めて楽器屋の二階にあるスタジオを借りて音合わせをしたときは悲惨なものであった。

まるで演奏自体に関係のないものであるかのように即物的な削り音を刻むベースと、バンド内で一番演奏経験のないイタルがたどたどしい運指で弦すら押さえ切れずに音がふれるギターを弾きながら、演奏のみならずヴォーカルまで担当するのだから悲惨である。キーの合わない歌声(歌うにつれて絞るようにキーが高くなる)をがなっていた。

だが普肅は大いに満足したのである。

「最高だ。抒情性の余地はない。非常にウエルダンだ」

以来、数ヶ月、少しも上達しない叭羅聶斗に比べてイタルはだいぶましになった。やがて彼はブルースの特徴を大仰にデフォルメするようになり、貯金を叩いてレスポールの中古品にギターを替えた。その頃からレッドツェッペリンを聴くようになった。携帯の着信音を『Whole Lotta Love』にした。

さて普肅はドラムスに坐ると、いきなり両足でバスドラムに三連符を打ち、ハイハットを二発叩く。

「時間がない。今は議論のときじゃない。論しても仕方がない。ハードボイルドで行こう。実践あるのみだ。練習を始めよう」

「それがウエルダンだ、って言いたいんだろう？」

叭羅聶斗がぼやいた。

『Street BLUE』^{ブルーズ}と云うライブ・ハウスがある。私はそれをどんなふうにしようか、また空想を紡ぐ途中である。バーボン・ストリートふうにしようか。ダウンタウンふうか。いや、ありふれた雑居ビルの地下でいい。信楽焼の表面には、信楽の土がかんている小石に起因し、焼成の段階で自然に生まれる「石はぜ」は妙味に富んでリアルである。そんなふうに味わいのある、朽ち果てたビルと云うことだ。Very Very Well - done.

かくしてライブ・ハウスのくすんだたたずみが現象し、空想が空想者を生み、私はいる。

安房市内の神中州にある『Street BLUE』、近辺の郡市では唯一のライブ・ハウス

だった。オーナーの八木周公^{やましゅうこう}は山羊髭を生やして喉仏の飛び出た痩せ過ぎの四十代、長く垂れた眉毛の下から弛んだ瞼に半分蓋われる眼で人をにらむ名物男だ。

演奏者は常に県内のアマチュア・バンドに限っているのも、商売度外視の彼らしいこだわりだった。そして基本的に未成年をステージに上からせないが、午後五時から六時までの開店前一時間を無料で解放し、高校生以上で二十歳未満のバンドに演奏の場を提供していた。この時間帯に客は自由に入れたが、入場料も取らず、ドリンクもなにも販売しない。

ただし未成年バンドなら無条件と云うわけではなかった。月に一度、その同じ時間帯に行われる公開審査に合格したバンドに限られていた。審査員はむろん八木独りである。

合格できるのは一回に一バンド限定で、合格者がないことも多い。だが一度合格すれば、その後一年間は開店前一時間の出演権が得られる。既にいくつかのバンドが登録されているが、登録バンドは互いに日程調整し合いながら登録有効期間内に順次出場して腕を磨くのである。

今月とはともに初挑戦の『VW』と『RZD』とが争う予定になっていた。

「わかってるさ」 叭羅蜜斗がベースを膝に置き直しながら言った。「俺はRZDなんかに負けたくねえや。イタル、おまえがドラムを叩けねえから普覇がやっているんだぜ。もしクールな奴を決めてくれよ」

「おまえのクールがわからないね」

だいたいな、オリジナル・パンクやっていたくせに、アグレッシブでクールに、かつアヴァンギャルドにか。意味がわからない。第一、おまえだってドラムができるのか」

普覇がスネア・ドラムを打つ。

「さあ、もう一回だ。BLUEZのステージは僕らで獲る。だれをもぶっ飛ばしてやろう。それだけ考えるんだ」

イタルがギターのストラップに手をかける。

「ふうん、よっぽどRZDが嫌いになったらしい」

「あんな奴だぜ。普覇が言うのも当然さ」

イタルはRZDと同じ幼稚園に通っていた。

その頃からRZDは自らをRZDと称し、RZDと云う人物になり切っている。自称をバンド名にしているところからも、憂鬱を気取った態度や時に凶暴さを覗かせる気紛れな、睥睨するかのような眼差しからも、嘶らかに世界を見ながらなにも見ていない、自分の内面世界しか見えないタイプであることを窺がわせる。

午後四時に練習を終えた。ドラムセットは移動が大変なので置きっ放しだが、イタルや叭羅蜜

斗が磨いてケースにしまうまでの間に普薫もやはりメンテナンスをする。いつもケアがいい加減な叭羅蜜斗が既に終わらせて言う。

「まだ明るいな。どうする？」

屈んでペダルを調整していた普薫が髪を邪魔そうに払いながら顔を上げた。

「そっだな、M_cにでも寄って打ち合わせするか、演る曲も完全には決まっていないし。M_cはいい。Coolになれる。」

なあ、時間はあるだろう」

イタルはケースのチャックを上げた。

「わるいが、俺はちよつと行きたいところがある。叭羅蜜斗、明日、俺たちの教室に来てくれ。ミーティングは昼休みにしよう」

叭羅蜜斗は嘲りの笑みを泛べる。

「かまわねえさ。おまえが学校に来るならな」

イタルはRZDのアパートに向かった。家に帰る目が続く最近だったので久方ぶりであった。RZDにはイタルと同じく真神村に家があったが、大して遠くもない学校に通うために親に仕送りをさせて市内のアパートを借りている。

イタルは事前に電話を入れた。そう言うことはしない性質であったが、楽夏とそこでは会いたくなかったからである。

「安心しなよ。俺なら今は独りだ」

神中州から数百メートル行くと鞆坊町であり、RZDのアパートはそこにあった。外階段を上がって二階がその部屋だった。鍵はかかっている。入るとすぐに狭いキッチンで鍋とケトルとが、その尖には一つ部屋があるだけだった。

斜陽の差す中、RZDは彫像のようにしゃがんでいた。物憂い表情。ウェーブのかかったまっ黒い髪を無造作に分けて肩に垂らし、どこことなくラテン系の顔立ちであった。

部屋には楽器も音楽雑誌もタブ譜もない。最小限の生活用品があるだけで、バンド活動を支えるものはパソコンと彼の手書きのノートとだけであった。ノートは広げられ、詩が書かれていた。

バンドで演奏するための詩も曲も全部彼が作るが、楽譜は書けない。楽器も弾けない。彼の作る楽曲は音楽的と言うよりかは彼とちやう表現者の自「表現のためのパフォーマンスペースを構成するためのものだった。

RZDの部屋には祭壇がある。古い仏壇に西欧アンティークの小さな燭台を飾り、非常に小さ

く緻密な受難磔刑の十字架像を立て、紫の絹で装丁された金字六つ折の摩訶般若波羅蜜多心経が六曲一隻の屏風のように立てられていた。最上段には深い青の額を持つフォトスタンドが置かれ写真はなく、かな文字で非常に細く、『**非**』と記されていた。金箔を細かく切って貼り、かたち做したものであった。そのフォトスタンドは以前にはなかったものだ。かつては小さなパネルがあり、雨に濡れたストーンヘンジの写真だった。

この野郎はまたいったい、なにに到達したと云うのか、そんな疑問からイタルが訊ねるとRZ Dは答えた。

「蛇だ」

「蛇？」

「蜥蜴じゃなくてか」

「同じようなものだ。蜥蜴の青い背も玉虫のように変易して捉えようがない。原蛇なんだ。わかるか」

「ふ。わかってたまるか」

「自分で自分の尾を咬む蛇だ。メビウスの輪さ。想像してみる。いったい、そいつは喰らっているのか、喰らわれているのか、喰らい終われるのか、喰らわれ尽くされてしまえるのか」

「まだだ。おまえの妄想だ。莫迦げた観念の上だけの論説に過ぎない。想像力の無駄だ。チープだよ」

「はん。そうかな」

こいつはおまえと同じさ。わかっているはずだ。だから拒否するんだろうな。おまえが俺の所に来るのは、おまえ自身へのアイロニーさ。おまえは楽夏に惚れている。おまえは自分を牽き裂くために来る。おまえの欲望は自爆することだけだった。炸裂を欲している。こどものときからずっとそうだったじゃないか。おまえはおまえ自身に異叛でありたいと切望している。おまえ自身への叛逆と云う欲望にとり憑かれているんだ。おまえは俺と同じなんだ。

だがまだまともな感情を捨て切れていないな。おまえは俺の所においても楽夏が来るとわかれば外へ出て行つた。だめだな。もつと牽き裂かれるよ。裂くんだ。欲しているのになぜしない？ 裂けちまえよ」

そっぽを向いたままイタルが鼻笑で嘲るように言う。

「ふ、なんだ、そりゃあ。阿呆らし」

RZ Dが薄ら笑いを浮かべた。

「まあ、いい。」

次のステージでわかるよ」

イタルは夜八時にRZDのアパートを出た。終電の関係だ。思いに囚われていた。フォトスタンドの青がイーリヤを連想させたからだ。まだ七歳だった。イタルが毎夏を過ごした別荘の隣に新しくできた白く屋根の尖った教会のような別荘に、彼女は或る夏、家族とともに来た。その双眸が青かった。美しい青であった。そう、青とはなんと云う美しい色であろうか。イタルは海を想つ。

バル

たとえば海鳥島のインディゴル浜から眺める海のLazurだ。そこにはサンチャゴ爺さんのBarがある。白い浜から拙く伸びた頼りない栈橋である。

栈橋は椰子の枝を粗綱で結んだものでしかない。

時々風に流されるが、手馴れたタフな爺さんはまたテキーラを呷りながら二百で組み上げてしまつ。

バルはその栈橋の尖にある。乾いた流木で組んだだけの小屋で窓にガラスなんか無い。

屋根は椰子の葉を葺いただけのもの。そこから木洩れ目がこぼれ、潮風が通る。床材は大まかに成形されただけで樹皮は既に波に削られてしまっている。素足にひんやりした、それでいて或る種の温みとも言える乾いた軽やかさを持つ、木膚に独特の感触が心地よい。それが与えてくれる解放感を楽しみながら見る海の、蒼、藍、紺、碧、青の燦々たる氾濫。

平和に満ちあふれ、穏やかでありながらも激情のように天空へと響鳴し、成層圏の彼方まで駆け上がる光の波瀾だ。

生存を絶命に至らせるまでに純粹なその透明度、これを喩えるならば水深百数十メートル下の小石さへもが異様な解析度で鮮烈に、分厚いクリスタル・ガラスを通して見るかのように生々しく映えたるさま。

青は最も濃く高貴なる蒼を湛えている。

奥に蒼よりもさらに本質的な蒼である蒼藍を做し、その奥には真髄である紺色の燦があり、燦火の奥にはさらに燦たる熾炎の碧があり、その真央にあるものは青であり、蒼であり、藍であり、紺でもあり、碧ですらあった。

イタルが、そして私が彼女の双眸を想い泛べるときに好むのもこの空想である。

彼の脳裏の中では彼女は古い装丁本の独逸語版『ウンディーネ』と重なっていた。

それは古い小説だ。別荘に特にしつらえた父の書齋にあった蔵書だった。読めなかったが、歳月を経た皮革の装丁や挿絵が気に入っていた。

書齋にあるもので彼の気に入らないものなどなかった。獅子や翼ある牡牛や龍首を持つ怪獣の

彫りがある大きな楓材の机にクリスタルの文鎮、革張りのソファにキューバ産の葉巻が入った象嵌細工の小函、金銀嵌細工が入ったモンブランに皮革製、パッド、薄ピンクの入った金細工のペンスタンドとクリスタルと色大理石のインク瓶とのセット、アラベスク文様の鮮やかなクム産のシルク絨緞、当時のイタルにとっては尊えるような極材の書棚が立ち並び、蒼古な雰囲気包まれた独特の静謐があつた。書籍を読むと言うよりか、頁をめくっては眺め、楽しんでいた。

トウキュディデスの『ヘロポネソス人とアテナイ人との戦史』伊訳版やサッルスティウスの『カテリリーナ内乱記』パリ写本復刻版、オロシウスの『異教徒に反論する歴史』、作者不詳の『アングロサクソン年代記』、ヴァッラ『コンスタンティヌス大帝進状論』、ヘルダー『人類史哲学の構想』、ミシュレー『フランス革命史』、ブルクハルト『世界史の考察』等々その背表紙を觀賞するだけで恍惚とした。埃の燦めく古代の図書館で天窓からの一条の光を浴びながら黙々と書見する修学僧の陶酔を味わった。

『ウンディーネ』は水の妖精の悲劇物語だ。人間に恋をし、魂を得る（妖精はそのままでは魂のない、自然のように気まぐれで無慈悲な存在らしい）が、やがてその最愛の夫を殺さなくてはならなくなる。そう云った内容だ。後に翻訳本で知った。美しくも哀しい妖精ウンディーネがイリヤのイメージと重なったと言うよりか、それを求めている重ねたのだと言える。今はもう思い込みに染められ、記憶は捏造されているから定かではないが、金髪碧眼の欧州人であつたという以外、二人に共通点はなかつたのではないか。

イリヤは外国人夫婦の一人娘であつた。父親はインド系、母親がギリシア系アメリカ人だつたように思う。母譲りの膚は白皙であつたが、眼の大きさがエキゾチックだつた。それを眼周のマロン色の暈と天仰な^{ふたえ}重のラインと邪教的なたちを描く斬らかな眉とが装飾し、リビアのアテナの燦眸のようでもあつた。

別荘は真神湾の海辺の高台にあつた。本宅から近い場所に別荘を構えるのは当時としても珍しかった。穏やかで明朗な真神の湾はわずかな砂浜を透き通つた波が優しく撫でる他は、白い崖が海に迫り、南フランス沿岸部のどこぞかに似ていて、別荘地とするに十分な価値があつたのである。壘之家には（今もそうだが）十分な余裕があつた。総じて真神郡一帯の村は裕福な家が多い。

イタルは湾に浮かぶ安房島をよく眺めた。島といつても松の生えた大きな岩でしかなかったが、その容姿は僅谷であつて、昇る朝に燦めく細波に独り立つ姿や夕日を浴びて沈む茜色の美しさなど、いくら見つめ続けても飽くことのないものだつた。

彼はイリヤと彼女の家族とが越して来た目をはっきり憶えている。その日は賑やかだつた。イタルは騒ぎを見ようと外へ出たものの、見たこともない（田舎では外国人を殆ど見かけなか

った。雰囲気の人たちに吃驚し、慌てて家内に引つ込んだ。

そして彼女を見た。父親に手を引かれて眼を輝かせながら別荘に入るイーリヤは眩い金髪の少女だった。その日から彼はこつそりと憧憬の眼差しで眺め続けた。話しかけるなど到底できなかった。いつも待ち、現われると遠くから隠れて見つめるだけであつた。

それだけである。なんの事件もなかった。

だがイタルは思い出す。あの頃は異様な幻想に囚われ、気がつくとその想像に捉えられていた。それはイーリヤの架刑像である。彼女が磔刑にされ、火炙りとされて悶絶死する姿であつた。幼少の彼は人間が剥き出しにされるその空想に畏怖しながらも、執拗に独りなんとも思い泛べ、胸裂ける陶酔を味わつた。

公開審査はくじ引きから始まつた。演奏の順番を決めるのだ。観る者の度肝を抜こうと計るバンドにとっては後でプレイするより先演技する方が客席に強いインパクトを与えられると云う点で原則的な優位性を持つことができる。

「畜生！」

叭羅筆が歯を噛み締めて悔しがった。V V Wはくじで負けたのである。普肅は傲然と顎を上げ、意に介さない様子だ。その眼は冷たくきえあつた。指先でスティックを回す。

「関係ない。僕らが最高だ。聴く奴らを凍りつかせてやるだけさ。そうじゃないか、イタル」

イタルは無表情だつた。

「ふ。」

めちやくちやをやつてやるのさ」

観客はまだ数人だ。だがR Z Dのステージは凄絶だつた。

ライトが落ち、ドラムスの大楽がスティックでカウントする。すると、デイストーションをかけた春慶のギターが音の洪水を起す。大楽がバスドラムの上に三つ並べたタムタムを右から左へ連打しながら素早く移動。それを、春慶が大仰なストロークを交えながら速いリフをかき鳴らし、その疾風で見る者を薙ぐような金属的な衝撃波を起した。数秒で突然それが止み、R Z Dがポケットから紙を出し、自作の詩を読み上げる。気の触れた古典劇俳優のようであつた。それも数秒、言葉の途中でR Z Dは葉が切れて禁断症状を起した患者のように叫ぶ。

最初の曲は彼らのオリジナル『憂鬱なるF氏の優雅なシガレット・ケース』でネガティブ・パンク。題名と音曲が全然合っていない。歌詞は放送禁止用語の連続で、すべて絶叫で押し通す。一曲目終わる。

「へえ、凄えもんだな」

叭羅蜜斗が軽く言っで見せる。イタルが言う。

「どうせまたラリってんだろっ」

普簫の冷笑。

「相変わらずのナルシストぶり。安っぽい、昔ぶうの異常気取り。大昔の莫迦な時代にありふれていた。スタイルに過ぎない」

女の子が一人ステージに上がり、キーボードの前に坐った。イタルは楽夏ではないかと瞬間どきりとした。だがそれは黒髪の良い見たことのない子だった。

一曲目が終わると鍵盤から幻想的なフレーズが霧のようにわき上がった。東欧の深い森に彷徨うような心地にさせる。春慶が十二弦ギターを出し、エフエクターのスイッチを踏んで切り替える。大衆がクラッシュ・シンバルを撫でるように叩く。ベースの翔太は最低音部でメロディのうなラインを奏でた。RZDの歌はまるで朗読だった。やがて呪文性を帯びてくる。複雑に組まれたルーン文字の円陣が泛ぶかのようにであった。静かに終わる。

審査時に演奏できるのは三曲までだ。春慶が六弦と五弦を親指のつけ根でミュートさせながら上下に刻む。そこにベースが二本の弦で做す和音を重たく絡ませる。目覚めたようなドラムスが加わると同時にRZDのヴォーカルが入った。

沙漠の非情 風の乾き 軍馬の群れ その鬣

炎が燃えて 黒く煙 陥落する城 トロイヤ

アキレウスが 膝を大地に 突いて 屈するとき

女が叫び 赤子が 叩きつけられる 虐殺の刹那

膝を屈す アキレウスの微笑み アルカイックな微笑み

アルカイックな

RZDが顔を歪めて喚きながら烈しく髪を振る。マイク・スタンドを振り上げて叩きつける。それを待っていたかのようにギター・ソロが噴出した。リリカルな激情を孕んだ、なにか運命のような悲愴な雄々しさを湛えたフレーズだった。絶叫調の歌詞は聴き取れないが、イタルの脳髓は嘶らかに『イーリアス』を飛び上がらせた。彼の脳内麻薬はヘレネをたやすくイーリヤに替えた。燃え上がり陥落する城砦は焼かれる磔刑のイーリヤだった。イタルの眼が現実には輝く炎を捉えた。それは彼よりも前列にいて躍り上がる楽夏の髪だった。ステージのライトを反射して跳ね

上がる度に燦めく髪の振り乱れであった。絶望的な気持ちにまでも襲われ、イタルは抜けるような爽快に魂を解放させられる。この狂疾が恋だ。ディオニュソスのオルギアだ。音楽は人間を駆る。切なく、激しく衝動させる。

イタルは人をかき分けて前へ進んだ。楽夏の肩をつかむと力任せに振り向かせた。髪を引っ張って唇を奪った。一瞬楽夏は眼を丸くした。なにが起ったか理解できないようであった。イタルは頬を張り手打ちされた。彼は再び力づくで彼女を引き寄せ、耳元で言った。

「ふ。そんなに好かったか？」

『畜生、ざけんな』

楽夏はもう一度、引つ叩く。周囲のいく人かがさすがに気がつく。イタルは傲然と周りを見据え返す。

十分以上続いた演奏は飽かせることなくエンディングとなり、終了後も余韻が残った。しばしの静寂。喚声。また静寂。遂にVVWの出番と相成った。

イタルは楽夏を突き放し、捨て台詞を吐いてステージの傍に向かった。そこが舞台裏の替わりになっているのだ。普簫と叭羅蜜斗は既に待っていた。

叭羅蜜斗は恐らく後年私にこう語るだろう。

「そのときにな、イタルは楽夏を意識するようになってからはじめて声をかけたんだ。こんなふうにね。」

『俺を見ていろよ、楽夏』

そんなぐあいだったのさ、俺たち」

観客は少し増えていた。奇抜な髪型や服装をして小がった輩が多い。彼らもバンドを演っているのである。アーティストの方が純粋な聴衆よりも多い。既に互いによく見知っている人間も多く、ああ、あいつも出て来たんだ、みたいな顔をされる。

「けっ、なんてチープだ、こんなもんか」

そう吐き捨てるイタル。沈黙だ。間のわるい沈黙だった。構うふうもなく、イタルは意味不明な呟きをする。

大音響が再び空間を庄した。愕いたことに第一曲目は『憂鬱なるF氏の優雅なシガレット・ケース』、『RZD』が最初に演奏したオリジナルである。もしこれが『VVW』に卓越した技倆があつて『RZD』を超えていたならそれはそれでアイロニカルな意味があつたであらうが、到底そんなレベルではない。ぶざまな、愚行としか言えない行為。だれもが啞然とした。なにをし

ようとしているのか理解できなかったのである。

イタルは驕慢な異教の神を気取って大仰に緋髪を振り乱し、顔を顰めて舌を出して震わせ唾を飛ばす。

演奏終了後、しらせ切った空間があるばかりだった。ブーイング以前の状態であった。イタルは聴衆を侮蔑するようにステージから睥睨している。それがなおさら滑稽で、ぶざまであった。叭羅蜜斗は山羊の角と耳とを持った淫猥なサテュロスのようにへらへら笑っただけ。普蕭は満悦する。

「最高だ！」

すぐさまスティックでカウントを取る。一曲目だ。叭羅蜜斗が重たいベースの単音をティラノザウルスの足音のように刻む。ズン、ズン、ズン、ズン、

イタルが緩やかで軽快なブルースのフレーズを爪弾いたかと思うと唐突にテンポの違う粗いカツティングのリフを繰り返す。ベースの音とは全く合っていない。ドラムが半拍ずれておもむろに立ち上がる。イタルが声を絞り上げるように歌う。

ロバート・ジョンソンの『Preaching Blues』だ。だが会場にいる人間はだれもその曲を知らない。演奏が終わり、再び息苦しい沈黙。普蕭がノーブルな鼻を突き立て堪能するかのように眼を細め、眉根を寄せる。まるで満足したメフィストだ。益々喜悅を隠せない。叭羅蜜斗は相変わらずへらへら、イタルがぼんやりなにかを考え込む様子で立ち尽くしている。

「フストー！」

その氣勢を上げた普蕭がスティックでカウントを取ろうとした瞬間、イタルが唐突にリフを刻み始める。軽快な、歯切れのよいカツティングで刻まれるリズム。

叭羅蜜斗は愕いた。知らない曲だからだ。思わず普蕭の顔を振り向いた。一瞬、呆気にとられていた普蕭だったが、すぐさまドラミングを開始する。慌てて叭羅蜜斗も追いつこうとする。CとF、シンブルな繰り返しでどうにかベースも間に合った。

君が好きでたまらない たまらないほど好きなのさ

だけど君は奴のもの 奴は君の彼氏だから

俺の心は伝わらない 伝えることなどできやしない

だから歌うぜロックンロール ロックンロールしかできやしない

ロックンロールはラヴレター ロックンロールはラヴレター

ロックンロール・ラヴレター Ahhhh!

凄まじくダサい歌詞、軽佻な、他愛もない安物ポップス、聴いている者らの人種を考えれば最悪のチョイスであった。叭羅蜜斗はやや赤面し、普肅は笑い出しそうになったが、それも凍りつく。イタルは身を裂くようにめちやくちやなソロを弾き始めたかと思うといきなりギターを振りかざし、ベース・アンプに叩きつけた。烈しい不協和音と電氣的なノイズ、ギターのネックが折れる。弦だけで繋がっている。イタルはその折れたネックをアンプに突き刺した。さらに耳を劈くような電氣的ノイズに、ハウリングのような鼓膜の痛くなる音が響き渡る。

呆然、だれも口を利くものはなかった。八木が怒号した。さすがの普肅も困惑を泛べる。

その夜のライブはすべて中止、バンド連中が息巻いた。八木はさすがに弁償とは言わなかったが、激怒し、普段の超然とした態度もどこへやら、血相を変えて叱責した。「いったい、どういうつもりだ！」普肅は「パフォーマンスです。やり過ぎでした。必ず弁償します」

叭羅蜜斗も仕方なく、それに合わせるようにわけもわからずも無言で平謝り。イタルは無表情に不思議なものを見るような眼で八木を見つめ返している。スツールに脚を組んで坐りながらカウンターにもたれて頬杖を突くRZDが悔しそうに笑う。

「二度と顔を見せるな」

八木は最後にそう言い放って背を向けた。

晴れてVWは出入禁止の身となり、叭羅蜜斗も不貞腐れ、普肅さへ意気消沈気味だったが、イタルは平然と嘯いた。

「『Street Blue』は卒業したぜ」

ライブ・ハウスを出るとRZDらが薄暗く汚れた歩道に屯してしゃがんでいた。彼らは今夜の審査に合格し、出演権を得ていた。その中に楽夏がいるのが見えた。

RZDが立ち上がり、イタルに近づいて来る。

「なかなかやるな、イタル。最高に安っぽいパフォーマンスだったぜ。おまえらしい、ブリキミたいな猿真似だったよ。」

だが、次はそうは行かないぜ」

イタルは応えなかった。楽夏と眼が合った。RZDらは去った。それだけだ。その後、三人は十数人の若者らに囲まれ、袋叩きに遭った。

「童生、もうおまえとはやっていられないぜ、イタルよ」

襲撃者が去って、叭羅蜜斗は鼻血を噴きながらそう喚いた。イタルは少しも抵抗していなかった。叭羅蜜斗は持ち前の腕っ節で相手のうち一人を叩きのめしていた。殴られるに任せて服はぼろぼろ、鼻が曲がったイタルは蔑むように鼻を鳴らす。

「ふ」

その日以来、イタルは姿をくらました。逃げた、隠れた、ほとぼり冷ました、と言われたが、再び彼が姿を現わしたときはだれもが驚愕した。顔の左半分が逆立つ青い龍の刺青に覆われているのである。

ものによるが、刺青を入れるには時間がかかる。イタルの精緻な刺青は線彫りだけでも一ヶ月かかった。彩色にはさらに一ヶ月。青龍の鱗はまるでイタルの皮膚が鱗状になったかのようであった。施彫の間イタルは市街の Tattoo 屋に通う以外は殆ど外出せず、学校へも登校しなかった。条例で未成年の刺青は禁じられていたが、知らない人間は凄すぎてボディペイントだろうぐらいに考え、本当の刺青だとは思わなかった。生涯終にそのゆえんで正式に咎められることがなかった。

イタルはいちいち説明も面倒臭いので、彫り物を施している間は家に帰らなかった。RZDのアパートに隠棲してやり過ごした。

「全くよお、よく来れるもんだな」

「ふ」

イタルは相変わらず嘲るように鼻を鳴らす。

二ヶ月以上家に寄らずともこう云った所業に慣れ、半ば諦めていた両親からは追究もされなかった。イタルが居場所を伝えていたせいもあり、RZDが同じ癲之の姓を持つ遠縁の者であったことも余計な搜索を免れた理由である。よって級友らも両親も或る日突然、顔面の左半分を青龍の刺青に覆われたイタルを見たのだ。

驚愕で紅潮した担任はすぐさまイタルを教科（英語）室に連行した。イタルは英語主任と担任とに挟まれた。生徒指導（体育・剣道）も現われる。

「それを落とせ」

イタルは無表情に黙っていた。

「なぜ黙っている。なんとか言え」

そっぽを向く。

「よし。生徒指導室に来い」

イタルは追隨した。生徒指導はタオルを濡らした。

「とにかくそれを落とせ」

イタルは嘲りを泛べた。

「なにがおかしいんだ、犂」

イタルは俯いてぼそつと言っ。

「どうやったらタオルで落ちるのかな、って思ってね」

「なに」

「タオル地で擦って皮膚を剥くんですか。そんな拷問があつたような気がする」

「どう云うことだ」

「冗談じゃねえ、って言っているのさ。こいつはTattooだぜ。皮膚移植の費用を出さうって言っなら考える余地もあるがね。」

無理だよ」

散々説教され、親が呼ばれたが、イタルは知らん顔で通した。その間も教室は騒がしかった。一度話題が終わってもすぐその話に戻る。昼休みにはその事件は他のクラスにも伝わった。

「奴ならいつかやると思っていたよ」

叭羅蜜斗はにやりと笑い、こともなげに言ったものだ。

「それが奴さ。やらすにはいられないんだ。他人が嫌悪の気持ちを抱くとなればならぬお前らだ。奴はとつちや、そう云う行為をPrettyと言っんだ」

イタルは二人を呼び出した。校舎に附帯する非常階段の踊り場だ。熱く強い風が吹いていた。

「活動を再開しよう」

叭羅蜜斗が喚ぐ。

「あたりまえだ。おまえが勝手に消えちまつたから止まっていただけなんだぜ」

普蕭は考え深げに頷いた。

「むろん僕らは負けたわけでも、道を閉ざされ、行き場を喪つたわけでもない。だめになったわけでもなく、だれかに縛られているわけでもない。活動再開は当然だ。しかし凄いいことをしたもんだな。まあ、こう云うことだつたんだな。」

で、新境地を開いたおまえのやりたいことはなんだ、イタル」

「もう人の前で歌うのは飽きたよ。俺の音楽をだれにも理解させたくない。眼に見えない悪鬼羅刹のためにでも詩を捧げたい気分だな」

叭羅蜜斗が声を上げた。

「よし、決まったぜ」

普齋が怪訝な顔をする。

「つて、なにが決まったんだ？」

叭羅蜜斗はけろりと言った。

「なにも。ともかくそうなることだ」

三日後、地方紙の社会面に小さな記事が載った。

『 県立高校生が深夜の古刹で乱行、県指定文化財あわや

昨日深夜、真神郡歌邨村の古刹に太音響が轟き、静かな周辺住民を驚かせた。この騒音で通報を受けた駐在署員の応援要請により現地に難久簀駒交番からもパトカーが出動し、一時周辺は大騒ぎとなった。騒ぎの原因は同村の貞観寺にある能舞台で県立真神高校二年生の生徒二名が深夜十二時からロック・バンドによる演奏を行ったことによるもの。少年二名は『新能』と称してかがり火も焚いていた。午前一時、警察に制止された少年らは早朝、保護者とともに補導センター職員に引き渡され、今後指導を受けるとのこと。少年らは警察の制止に抵抗し、一名は「これは悪魔への儀式だ」と意味不明な言葉を喚き続けた。なお、機材を運ぶために少年一人が農協の軽トラックを運転。無免許であった。

同寺の能舞台は元禄年間に建造され、県の指定文化財。あわや出火の事故となる怖れもあったため、所轄の消防署からも保護者と真神校とに対して厳重注意がなされ、県教委もことを重大視している。

同校校長のコメントによれば……』

紙面にもあるとおりイタルらは新能を考えた。むしろ能を舞うのではない。バンド演奏による彼らの『新能』だ。イタルは普齋から借りたフェンダーのギターを手にしていた。

「しかしなんで俺ン家でやるんだ？」

叭羅蜜斗の質問にイタルは答えた。

「言っただろう、悪魔に捧げるためのさ」

「寺だぜ」

「そっさ。敢えて神の前でやるんだ」

「だから家は寺だったの」

村に轟き渡った第一曲目はローリング・ストーンズの『悪魔への共感』だった。警察や消防からたつぷりしかられた。バンド活動は禁じられた。学校は停学となった。RZDは話を聞いて大

いに笑った。

「やられたぜ！」

彼はライブ・ハウスで演奏活動したのはあの童童の日以後は一回だけであった。バンドは休止していた。学校にも完全に来なくなっていた。

イタルは携帯電話で楽夏を呼び出した。電話の向こうで楽夏が声を荒げる。

「なんであんたが番号を知っているのよ」

「RZDの携帯で見た」

「覗いたの！ 最低ね！」

「最低の屑さ。そう言われたくて電話してるんだ。そのぐらい、わからないのか」

「わかるかよ。で、なに」

「RZDはどうしている」

「知らないわ」

「電話にも出ない」

「勝手に行つて見てくればいいじゃない。そうすればわかるわよ」

「俺はな、あいつの所に行くときだけはアポを取る主義なんだ」

「知るかよ」

「奴は苛立っているのさ。焦っているんだ」

「どうしてそんなことが言えるの」

「奴が俺に勝てないからさ」

「莫迦じゃない」

「奴はたぶん、ドラッグに溺れている。今まで以上にな」

「わかっているんならどうにかしてよ」

「俺が負けるしかない。だがそれは無理だ」

「そうね」

「俺の言う意味はわかっていないだろう」

「なんでよ」

「なんで負けれないかわかるか」

「男同士だからでしょう、いいわよ、仕方ないって言いたいんでしょう」

「違う」

「俺は最初から奴と闘っているんじゃない。だから負けようがない」

そう言う意味さ」

「ああ、そう。もついいわ。それがなんだって言うの。
ほんっと、あんたと話してられないよ」

「おまえが明日はRZDのところへ行かないなら、俺は行く」

「私はしばらく行かないわ。行けないのよ。来るなって言うから。」

で、私が行くか行かないかがなんの関係があるの」

「別に。俺は頭がおいしいのさ」

「知っているよ。気味のわるい刺青して。ほんとうの莫迦だよ、学校に来て欲しくないわ、気持ちわるいから」

「奴が俺に勝つ方法はいくつもない」

「なんなのよ、唐突に」

「いや、もついい」

沈黙。

「ねえ、あんたどうする気なの」

「なにが」

「これからよ」

「勝手にRZDのところへ行く。それだけだ。意味はない。」

もう訊くな」

「そうじゃなくて、バンドよ。あんたら、もうなにもできないじゃない」

「いや」

その直後、イタルの携帯電話が鳴った。少し待った。鳴り続けている。出た。普簾だった。
「どうしてすぐ出ない。どこかへ抜け出したかと思ったぞ。今な、叭羅蜜斗とも繋がったところだ」

三人はそれぞれの家で塾居中の身上、こうして電話でしか話し合えなかった。その時点までは。

「それでよ、どうするの」

叭羅蜜斗がへらへら笑いながら訊いた。少し起こり気味に普簾が返す。

「どうするって？ それをこれから話すんだ」

「だからさ、八方ふさがりじゃないか、俺たち。これで終わりか。まあ、やるだけのことばやっただけで感したな。」

これ以上はもうないだろう」

「ふむ」

普蕭も言葉に詰まったようだった。

「そうかな」

黙っていたイタルが口を開いた。

「まだだ。」

まだ到底満足できない。もつとやれるはずだ。終りなんかない。終わることができない。ラッキョウの皮みたいにとこまでも剥けちまうはずなんだ」

叭羅寧斗が嘲笑気味に言う。

「おまえの望みどおり俺たちは人に聴かれることさえ無視して、パフォーマンスしたんだぜ。それ以上のことがあるか」

「『新能』はほんのエピソードだ。或いはイントロでしかない。ほんとうの、真の現実はこちらだ」

少ししてから普蕭が訊ねた。

「どうする気だ」

イタルが笑う。

「どうするかって？」

なにもないさ。どこへ行くかって？ なすべき根拠もないが、さりとてなきぬ理由もない。真実も虚偽もないし、理解されることもされないことも全く同じことだ。成功も失敗も勝利も敗北もない。

やるだけさ。ただそれだけだ。現実しかないからな。

いいか、キューバ革命を知っているだろう。フィデル・アレハンドロ・カストロ・ルスはキューバに上陸するのに十人乗りのボートに八十二人を乗せた。動くこともできない。二基あるエンジンが交互に故障し、船足は進まず、嵐も来た。最悪だ。航程は三日も遅れた。そんなことも知らずキューバ内地で準備していたフィデルの仲間が到着予定時刻にサンチアゴ・デ・クープで武装蜂起し、全滅した。海を渡って来るはずの革命戦士たちが来なかったからだ。

フィデルたちは遅れた上に予定の着岸地点に到達しなかった。殆ど難破同然でキューバに上陸した。たちまち政府軍に発見され、襲撃され、なんとか逃れるも数日後には農民の裏切りに遭い、バチスタ政府軍の奇襲を受けた。彼らは山中で二、三人のグループに分かれ、万が一の場合の集結地点であるモンゴ・ペレスに向かう。フィデルは七日間、飲むことも食べることもできなかった

た。二週間後に到着し、その二日後に遅れて着いた弟のラウルを含む四人と合流した。七人になった。

そしてフィデルは言った。

『ライフルが七挺。我々は戦いに勝ったぞ』

わかるか。フィデル以外の人間なら壊滅状態と考え、絶望するだろう。だが現実には彼はわずかに三十三歳で軍事政権を打倒し、武装闘争によるキューバ革命に成功した。この世にあるものは現実だけなんだ。探しても答なんかない。フィデルは屈しなかったし、戦略戦術を駆使したし、最後に勝利もした。民衆の共感があったからでもあり、強靱な肯定的精神力でもあり、正義への情熱でもあった。これだよ」

「なにがこれだよ、だ。わかんねえよ」

叭羅蜜斗が喚く。

しかし普肅は言った。

「ふむ。それが現実と言う奴か」

「ああ、そうさ」

叭羅蜜斗が唸る。

「あらあら、そんなつまうのかよ。まったく、しょうがねえな」

イタルはこうしてRZDのアパートに行く機会を失した。

夜十時、各々家を抜け出した彼らは再びトラックを運転し、神中州中央公園にある噴水の前に乗りつけた。むろん園内は車輛進入禁止だ。しかもまたもや無免許である。荷台には既にセッティングし、固定したドラムセットがあった。アンプ類も載せてあった。二台の発電機を動かす。「チェ・ゲバラに捧げる！」

イタルの絶叫でゲリラ演奏が始まった。アベックたちを驚かす。

(演奏の状況)

演奏の途中でイタルは用意していたリットル入りの小さなポリタンクをスポーツ・バッグから持ち出す。ガソリンが入っていた。噴水に撒く。

「やめろ、イタル！」

ドラムを中止して普肅が叫んだ。イタルは普肅から借りていたギターに火を点じる。噴水盤に放った。凄まじい炎が上がる。

「ちえっ、やば過ぎるぜー」

叭羅蜜斗が青ざめる。イタルは恍惚と矢を眺めた。警察官に両腕を捉えられても薄く笑っていた。

「イーリヤ」

そう呟きながら。

消防車のサイレンが鳴り響く。三人は警署へと送られた。

父親がイタルを叩く。

「莫迦野郎、貴様と云う奴は！」

イタルは唾を吐いて憑かれた者のように罵り、挙句に吐笑するのであった。

中央署の少年留置に（勾留に替わる観護留置として）十日間独房に留置され、取調べを受けた。取調室での聴取の他にも現場へ行ったり検察庁へ行ったりもした。移動中は手錠がかけられ、独房でなにもせず過ごすしかない。十日が過ぎても留置のままであった。どうやら取調べが終わるまでは少年鑑別所に送られないようであった。

やがて検察官から家庭裁判所に事件の送致があつたらしく、イタルらは鑑別所へ送られる次第となった。鑑別所で四週間の鑑別期間を過ごした。所内では独房に二人ずつの割り当てであった。一番心配されたイタルは美に優等生で顔の刺青ゆえにトラブルを起こしやすいとも懸念されていたが、少なくとも表面上は巧みに処世し、なんの騒動も起こさず、また起こされもしなかった。相室の少年はあらかじめ刺青のことは言い含められていたし（それでも最初は両眼を丸くしていたが）、偶然にも当時の所内ではかなり大人しい（大人しい人間ほど危ないとも言えるが）部類に属する方でもあった。イタルは図書室での読書を特に希望し、可能な限り努めた。彼は『モンテ・クリスト伯』と『宝島』と『銃士』とを凄まじい速度でそれぞれ五回ずつ読み返した。

親権者の調査も終り、鑑別期間が終了すると家庭裁判所で審判が行われた。裁判官、書記官、調査官、それに鑑別所職員が加わって行われた。本人、親、弁護士が立ち会った。教師は来なかった。事実認定や要保護性の審査を終え、保護観察処分が言い渡された。イタルの親は豪奢な祝儀袋に包んで弁護士に金七拾二萬五仟圓を支払った。

帰宅した日、イタルはRZDの死を知った。

死体の発見者は寒夏だった。部屋中央に紙屑に囲まれるようにうつ伏せで斃れていて、死後一週間が経過していた。ベッドから転げ落ちたようにも見えた。恐ろしく苦しみもがいて落ちたのである。時間が止まったかのようにその眼は開いたままであった。南西に向いた部屋は黄昏の光が深く差していた。

樂夏の悲鳴で人が集まる。救急車が来た。警察も来た。死因は急性心不全。だれもがドラッグのやり過ぎだと考えたし、実際そうであつたに違ひなかつた。イタルは帰宅したその日の夜、暗い部屋で膝を抱えずと考えるでいた。微動だにしなかつた。

ようやく電話に出る。

「運命さ。元氣出せよ。それとも追悼コンサートでもやるか」

叭羅蜜斗が携帯電話から軽口ふうに言ってみせる。

イタルは力なく言つた。

「やめよう。無理だ」

他の二人は息を呑んだ。

沈黙の後、ようやく普蘆が応えた。

「そうだな」

叭羅蜜斗が溜息した。そして相変もわらぬ軽口ふうで言う。

「へへ、どうしたおまえらしくもない」

イタルの口調は冷めていた。冷たく微笑んでいるようにも聞こえた。

「そう意味じゃない」

「じゃあ、どうなう意味だよ、それ以外のどんな」

叭羅蜜斗が問おうとする。普蘆がそれと同時に呟くように言つた。

「そうか。」

「そうだな」

イタルはどちらにも応えず電話を切つた。

午前零時を過ぎた。

再び電話が鳴る。躊躇した。義務を感じた。溜息し、受信する。樂夏であることは番号からわかっていた。

「イタル、聞いたでしょう」

「ああ」

「あんたが莫迦なことしている間にね、彼は死んじゃったわ！」

「らしいな」

樂夏が息を呑む音が聞こえた。それから、

「ねえ」

「なんだ」

「こうなることがわかっていたんでしょ。どうして」

「皆いつか死ぬ」

「真迦野郎！ わかっているわよ、そんなこと！ そんなことしか言えないの！ いつもいつもあんたは、あんたはどっしてそんなに阿呆なの！」

「そうか」

樂夏が涙を啜る音。だが声は落ち着きを取り戻していた。

「イタル」

「ふ」

「あんたの負けね。そうでしょう。RZDの勝ちね」

イタルはしばらく黙ってから応えた。

「当然そうさ。そうあって欲しいね」

どうしてイーリヤに惚れていたんだろ。イタルは考えていた。どうして今さらそんな意味のないことを考えるのかも考えていた。それは樂夏になにを求めていたかを考えることでもあった。自分は自分の欲しいものを求めている。RZDを救おうと考えていたか。そうならばなぜ救おうと考えたのか。なぜ救済しなければならぬのか。なぜ理由が必要なのか。生きることに意味があるのか。なにもないのか。もしそのどちらかであるならだれも生きようとはしないし、イタルも焦燥しなかったに相違ない。

究極の炸裂は死である。

真神山の大盤を見上げた。イーリヤの幻想が蘇る。磔刑のイーリヤを見上げている自分を思い出すのだ。民衆にとって公開処刑は娯楽でしかない。格好の見物と云うわけだ。それは遠い思い出だ。

イーリヤが牽かれると歓声が怒号交じりで上がった。

蒼穹を背景にイーリヤは磔にされた。

燃える水が小さなバケツ一杯分撒かれ、点火される。一瞬で爆発のように燃え上がった。群衆の声はさらに烈しく、波浪のようにうねる。煙が丘の上の風のために斜めに流れる。この場所が選ばれるのは煙ですぐに窒息死させないための工夫だった。窒息死できないとなると人間は炙られ続けることになる。人間は焼かれただけではなかなか死ねない。骨が露出するまで肉を炙られ

ようとも死ぬるものではない。よつて絶命に至るまでは凄絶な場面が繰り返されることとなる。イーリヤも炙られ始めはもともと身を動かすだけであつた。それでもかなり熱いのを堪へてゐる。

だが炎が一 m 強に近づく縛られた手足を引きちぎろうとするかのように上下に激しく悶絶した。髪が縮れる。叫びが上がった。凄絶な表情。炎が彼女の足先に届く。もはやイーリヤの動きは常人のものではなかつた。意識を失う。だが一瞬だけだ。あまりにも熱いために意識が戻る。その間一秒でもない。意識が戻つた途端、弾かれたように身を仰け反らせ、絶叫。凄まじい熱さで意識を喪失。飛び跳ねるように意識を取り戻す。狂叫。これがいく度もいく度も繰り返された。人間の光景ではなかつた。

イーリヤの着物一片が火の粉となつて胡蝶のように舞いながらスローモーションでイタルの顔に落ちかかろうとする。彼は右手で払つた。叫ぶ。

数人の刑吏がイタルを押さえつける。彼は私をじつと眺め、いった。「そして僕は把握を免れようと身も裂くように暴れ、破れながら翔けり躍るように叫び続けるんだ」そして憂うように微笑んだ。

実際、イタルは叫び続けた。私の喉が裂けそうなくらいに干乾びる。丘の上の刑場でのこれら凄惨な出来事がリアルになればなるほどに、鮮烈にしていた。爆裂の嗤笑をする。砕け散るシンバルの響きのような嗤笑をする。

炎が磔の尖まで上がった。

イーリヤの踵の肉が焼かれ、骨が露わになる。着物は焦げ縮れたぼろ屑となり、髪はないも同然。もがき方も猛烈で、既に正気ではなくなつていた。それでもまだ死ねない。

火炙りにされる者の最終的な死因は心不全だと謂う。

イタルはガソリンを被ると飛び降りた。

